

鹿児島県のイチロー

満山 一朗（2組）



《糖尿病がもたらせた奇跡の人生》

私は小さい時から駆けっこはいつもビリ。鉄棒の逆上がり一つ出来ず、跳び箱飛べずの大運動オンチで、玉龍時代の運動会では雲隠れを得意としておりましたので、私のことをご存じの方は極々一部しかおられないはずです。そして六十一歳の夏までは、文学系の人間として地味に地味に過ごして来ました。

強いて私が人様から一目置かれていたとしたら、カラオケスナックのママさんから「マイウェイは満山さんにしか歌わせない」と言われていたことくらいしかありません。

それが六十一歳の夏の終わりに糖尿病との宣告を受け、食事療法と何か運動をして血糖値を下げよと医師に命じられたことで、歩くのは大嫌いだだったので、立ったままで汗のかけそうなバッティングセンター通いをするにしましたわけです。

そして天の神様が一本のホームランを恵んで下さったことから、私の人生は想像だにできなかった方向へ“これでもか、これでもか”と流され続けております。

テレビや新聞雑誌などのお蔭で人から注目されたり、夢を託される存在となった為、誰もやらないような過酷な鍛錬を積んで来ました結果、七十二歳の現在、私の体は二十七歳台のレベルを超えるパワーとスタミナを備えるに至っております。現役の野球青年たちや甲子園球児たちを相手に「フルスイングの真っ向勝負」を展開しております。 “日本初”の一人の打者が受けて立って、ホームラン対決をするというイベントをメテオ・スパードームのご協力のもとに行っております。

「鹿児島県のイチローとの一対一のホームラン対決」というものです。一年間で公開の記録用紙に記入された対決は五百十回ありまして、私の二百九十六勝百二十七敗八十七引分けという結果になっております。ホームランの数は私が七百八十七本で、挑戦者たちの合計は四百二十九本となっております。

この対決イベントは、テレビなどで五回の取材がありますが、私の七勝二敗一引分けで、ホームランの本数は私が十九本で、挑戦者（全員社会人野球選手）たちの合計は二本となっております。客観的に公開記録用紙の結果を裏付けております。

若い時何らの運動もしたことの無い七十二歳が、元氣盛りの若者達相手に“受けて立つ”なんてことをやらかした上に、現役の甲子園球児の四番打者と飛ばし合いをして勝てるなんて夢にも思っておりませんでした。

天の神様のいたずらにだとしても度を越えている感じです。

最も新しいテレビはCBCテレビの十一月七日でしたが、これが少しカットされたものをインターネットで流しておられます。「七十二歳、鹿児島県のイチロー」と検索して下されば出て来ます。

関心のある方はご覧になってみて下さい。この日は四人の野球青年と対決させられたのですが、私だけが七本のホームランを打って、あとは勝った野球青年（点数制なので打率で勝った）をはじめとして、誰もホームランは打てなかったため“特大ホームラン”という表現になってしまったものと思われませんが、実際には普通のレベルのホームランです。

年々衰える頭とは裏腹に、パワーやタフさは逆に年々上がり続ける一方ですが、これは多くの野球青年達が惜しむことなく色々なバッティング技術を教えてくれたり、見守ってくれているお蔭なのです。

それに加えて、同級生の皆さんが夢を託して下さいますが、新たな大きなエネルギーを生み出してあります。本当にこんなありがたい人生は無いものと心からの感謝の念の絶えない昨今です。

（私の戦いの軌跡に関心をお持ちでしたら、ファンの方がホームページを作って下さっておりますので<http://www1.ocn.ne.jp/~k1chiro/>をご覧ください）

いくつか写真を紹介しておきます。

①「鹿児島県のイチローとの一対一のホームラン対決」をおこなっている「メテオ・スパードーム」です。テレビなどを見て全国から挑戦者がやって来ますが、そのほとんどを返り討ちにしております。

②燃費テストの途中に、あちこちのバッティングセンターに武者修行に立ち寄っておりますが、これは青森県のバッティングセンターでのホームラ



ン記録です。県外で打った時はノートに記載してもらっております。

出会った青年から“鹿児島県のイチローさんですよ、こんなところまで来られるんですか”と言われまして“えっ、青森でもわかるのか”とビックリしましたが、あらためてテレビの影響力の凄さを思い知らされたものでした。

③東京での収録でよくお世話になる「神宮バッティングドーム」です。

三船敏郎さんの娘さんの司会での収録の時はサインをもらって帰りました。さすがですが、台本が私が見たのと若者にバットにサインして渡すという設定だったので、つい“サインを下さい”の一言が言えませんでした。惜しかったです。

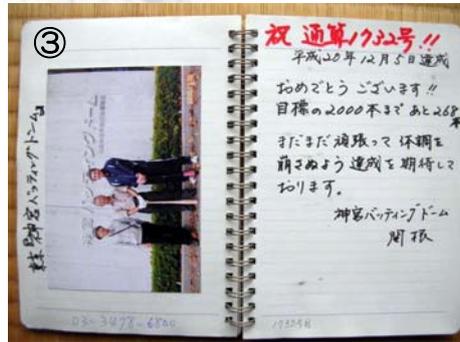
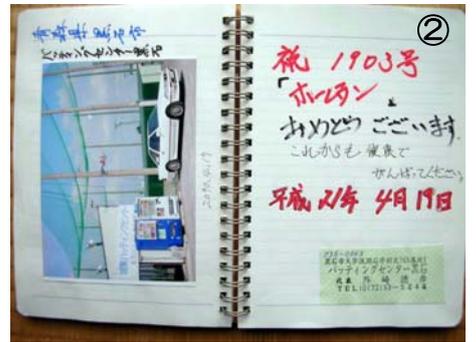
④テレビ三社が一緒になった時の収録風景です。

時々一緒にになってしまうことがあります。なぜか重なることが時々出ております。

⑤私との「ホームラン対決」で、よく一緒に写真を撮らせて下さい”と頼まれるのですが、上級レベルの野球青年の時には“私に勝ったら写させてあげよう”と言うこともありまして、この青年は三度目にしてようやく勝ったのですが、この嬉しそうな顔が素敵ですよ。

こんな顔を見るのが私も大きな楽しみなので人知れず過酷な鍛錬を積んでいるわけです。

⑥右のバットは野球青年達が驚く千四百gのバットです。これを私と同じようにグリップエンドに小指をかけて、長々と握ってフルスイング出来る野球選



手がいないので、私のような老人が高い勝率とホームラン率を誇れるというわけです。

時々修理の必要があります。その時には二二六kgのバットを代用しております。

左のバットは、私が考案した「可変重心、可変重量式トリーニングバット」です。単純な重さは一六kgですが、頭の方に重りを沢山付けてあるので、実際にスイングすると金属製の二kgのトリーニングバットより重たくなるのです。

人の見ていないところでこれを振り回して、体のあちこちを傷めながらも必死に鍛え上げてヒーロー役を務めているわけです。



《「たけしの等々カベース」の収録裏話》

続く時は続くもので、この半年間は「マツコの知らない世界」「月曜から夜ふかし」「天才テレビ君」「バッティングセンター・ホームラン対決」「たけしの等々カベース」と続いた。

この中で“ホームラン対決モノ”はたっぷり収録しながら、“すみません、企画がお流れになりました”と言って来たが、以前この手で他の番組に流用したのがあったので、コレもかかった費用からみて必ずどこかで使うものと思っている。

二回放映された為か、見る人が多くて反響が多かった「たけしの等々カベース・バッティングセンター道」は、出演依頼が来た時に“私は上がり症でスタジオものは全くダメなのと、飛行機での移動はダメなので全て公平にお断りさせて戴いておりますが、これ以外なら一応オーケーです”と言ったところ、それでいいということになって東京に行くことになった。



ところが台本が送って来たので読んでみると私のセリフが結構あるのだ。しまった、コシを確かめるのを忘れていたと後悔したが、もう後の祭り、覚えるしか仕方がなくなつて新幹線の中で必死に暗記した。

指定された東京足立区のバッティングセンターに行く、もう皆さん集まっておられて打ち合わせが始まるころだった。

撮影開始十分くらい前に“ビートたけし”さんが駆けつけて来られた。かなり忙しい様子で、時間が無かったらしく、打ち合わせは数分程度で本番はコンビ二で買って来られたらしい助六を食べながら進行して行くのだが、これが絵になっているのが凄いなと思った。

そしてもう爆笑の連続で、私は最後に登場することになっているので、この様子を反対側の椅子に座らされて見ているのだが、面白さに引き込まれてしまつて自分の言わねばならないことを殆ど忘れてしまつて、どうしても思い出せずに頭の中が真っ白になった。

そして出番が近づくにしたがつて、焦りと緊張で肩や首筋がコリコリに凝つて来て、たけしさんと同じようにコリほぐしの動作をしてしまつて、ハツとして止めたが、それを見たプロデューサーの人が後ろに来て、ずーっともみほぐして下さつて大助かりだった。

本番では司会進行役のタカさんが“伝説のプレーヤーを紹介します”とか、紹介役のYさんが“バッティングに関しては他の追隨を許さない”などと大げさに紹介されるので、尚更に上がつてしまつて口の中はカラカラになった。

椅子にかけても唇が濡いてしゃべれない感じだったが、映像にもベロで湿らせているのがバッチリ映っている。

だが、一呼吸おいてからはタカさんが上手くりードして下さつたこと、たけしさん”はじめ皆さんが絶妙に合いの手を入れて下さつたお蔭で、なんとか必要なことを言うことが出来ているようだ。

そして自分のバッティング論を実証せよとのことで、皆さんの前で十球ほどをホームランの的を狙つて打つことになったが、野外のバッティングセンターの為に白内障が悪さをして見えにくかったが、詰りながらも一応ホームランの的に近いのを二本打つて、なんとか役目を果たすことが出来て内心ホツとした。

その次に元木さんが打つたのだが、私が打つた後なのでちょっと力みが出て、そ

れとバッティングセンターに馴れていないこともあつて打ちにくそだった。

やはり映像ではカットしてあつたが、真剣に打たれていたのでプロの打法として我々の研究用に欲しい映像だった。

その後は福岡からやって来られたエア式のマシンでの体験があつたが、これはボールの出るタイミングが全くわからないので、私は一本しか打てなかった。

たけしさんも打たれたが、私同様タイミングは鋭くて素晴らしかった。

終わつたら皆で記念写真を写されたが、もう七十回以上テレビに出されているが、こんなことは初めてで、本当にいい記念写真になった。

全てが終わつてから“たけしさん”に、今回使つて、その重さに皆さんが驚かれていた千二百gのバットにサインをお願いしたところ、凄く書きにくいのに気持ち良く“ビートたけし”と書いて下さつた。

このバットは、メーカーから直接購入したものを私のバッティングに合わせて、最大限にヘッドが重くて走るようにと、グリップ部分を極細に切削加工しているのだ。(一番細い部分にその細さが解るように一田玉を載せて写してある)

この加工により、千二百gのバットとしては最大級のヘッドの重さにしてあるので、たけしさん達がよくこんなのを振れるなあ、凄いよ”と何度も驚かれていた。

このテレビは、一週連続で放映された為に、結構見た人が多かつたらしくて、メテオ・スーパードームに“ホームランを打つて見せて下さい”とか、“たけしさん達が何度も驚かれていた千二百gというバットを見せて下さい”と言って、訪ねて来られる人が続いているし、大型ショッピングモールへ行ったりすると“たけしさんのテレビで見ましたよ”と声をかけられたり、写真を撮らされている。さすがは“たけしさん”の番組だなと感心している。

